

加齢に対する信念の尺度作成の試み

坂口 奈緒

第1章 序論

本研究では、自分自身の加齢のプロセスをどのように認識しているかという主観的老い(Subjective Ageing)の検討を通じて、サクセスフルエイジング達成のための心理学的アプローチを検討した。これまでの縦断研究において、主観的老いは将来の健康や寿命を規定する重要な要因であることが明らかにされてきた。本研究の目的は、特に40歳以上の中年期の人が自身が将来どのように老いていくと预期しているかという主観的老いに着目し、それを捉えることができる多次元尺度(加齢に対する信念尺度)を新たに開発することとした。なお、本研究では全ての調査において40歳以上65歳未満の中年期の人を対象にweb調査を行った。

第2章 研究1 予備尺度作成

研究1の目的は、加齢に対する信念の予備尺度を作成することであった。まず、加齢に対する信念として想定される事柄を主観的老いに関連する文献から探索し、211項目を作成した。これらの項目を用いて2回の調査を実施した。1回目の調査では、探索的因子分析の結果、加齢に対する信念は【身体機能の変化】・【余裕と成熟】・【自己効力感の低下】・【経済的余裕】・【ソーシャルサポート】・【社会との関わり】の6つの構成要素から成る構成概念であることが示唆された。これらの因子を構成する項目の過不足の調整・洗練をし、70個の項目を選定した。この70項目を用いて2回目の調査を実施し、探索的因子分析を行った結果、加齢に対する信念は1回目の調査で得られた6つの構成要素で構成されることが確認された。ただし、【身体機能の変化】は【身体機能の低下】と改めた。この結果を踏まえ、項目を選定し、各因子5項目計30項目から成る尺度を加齢に対する信念の予備尺度とした。

第3章 研究2 尺度作成及び妥当性と信頼性の検討

研究2の目的は、予備尺度をもとに、より洗練された尺度およびその短縮版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった(分析Ⅰ・Ⅱ)。さらに、分析Ⅰを経て作成した尺度を用いて、加齢に対する信念の規定要因を検討すること(分析Ⅲ)、加齢に対する信念が将来の健康や寿命を予測するとされている希望寿命(個人が「これくらいの年齢まで生きたい」と望む年齢)を規定するかどうかを検討することを目的とした(分析Ⅳ)。

分析Ⅰ・Ⅱでは、6因子各5項目の構造、6因子各3項目の構造に基づく確認的因子分析をそれぞれ行った結果、ともに適合指標が良好であったため、前者を通常版尺度、後者を短縮版尺度とした。それらの信頼性、併存的妥当性、収束的妥当性は十分に認められた。

分析Ⅲでは、社会人口学的要因・社会的要因・身体的要因・心理的要因がそれぞれ独立して加齢に対する信念を規定するかどうかを検討するため、加齢に対する信念の合計得点を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果、社会人口学的要

因・社会的要因・身体的要因・心理的要因はそれぞれ独立して加齢に対する信念を規定し、加齢に対する信念は多層的な要因により規定されることが示唆された。また、暦年齢・主観的経済状況(社会人口学的要因)・同居者の有無・ソーシャルサポート(社会的要因)・主観的健康観(身体的要因)・誠実性・外向性・開放性・調和性・老いに対する態度(心理的要因)が加齢に対する信念を規定し、暦年齢の高さ・良好な主観的経済状況・同居者がいること・ソーシャルサポートの多さ・良好な主観的健康観・誠実性、外向性、開放性、調和性の高さ・ポジティブな老いに対する態度が加齢に対してよりポジティブな信念を規定することが示された。

分析Ⅳでは、社会人口学的要因・社会的要因・身体的要因・心理的要因とは独立して加齢に対する信念が希望寿命を規定するかどうかを検討するため、希望寿命を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果、加齢に対する信念は他の要因から独立して希望寿命を規定し、中年期の人が自身が経験する将来の加齢経験をよりポジティブに捉えている場合、希望寿命が長い、すなわち、これからの人生を生きる動機づけが高く、長寿願望が強いことが示唆された。

第4章 総合考察

本研究の限界点は横断研究であったため、研究2において分析した加齢に対する信念の規定要因と希望寿命との関連は慎重に解釈しなければならない。今後、縦断研究を行うことによって、これらの因果関係を明らかにしたり、加齢に対する信念が6つの下位因子に対応する事柄の加齢に伴う変化を予測するかを検討することができるであろう。

本研究を通して、高齢期におけるサクセスフルエイジングを達成するためには、「生きたい」という生きることに対する動機づけを高めるよう、よりポジティブな加齢に対する信念を抱けるような取り組みが必要であると考えられた。本研究では、ポジティブな加齢に対する信念を抱いている人は老いに対する態度がポジティブであることやソーシャルサポートが多いこと、すなわち、中年期までの老いの経験をポジティブに捉えていることや中年期における社会的つながりが多いことがわかった。そのため、中年期以降に老いを実感してきた際に、喪失ばかりに目を向けず、それを年を重ねて成熟した結果であるとポジティブに捉え直したり、老いることで得られることに目を向けられるようになることが重要である。また、高齢期に入る前段階から社会的つながりを構築することができる環境を整えることが必要であると考えられる。(臨床死生学・老年行動学)